高尾山報 令和2年3月号 毎月1回発行 通巻第674号

高尾山報

令和2年3月号

声をはり 善男善女 福は内

法の水茎 (93)

大正大学講師　髙橋秀城

今年は春の訪れが早いようです。庭先の紅梅も二月中には満開を迎え、鳥の囀りもにぎやかになってきました。例年よりも半月ほど早い春の輝きです。

暮るると明くと
目かれぬものを
梅の花
いつの人間に
移ろひぬらむ

（『古今集』紀貫之）

（日が暮れても、夜が明けても、ずっと目を離さなかったのに、梅の花は、人のいない間に、いつ色あせてしまったのだろう）

日常に明るさ添えていた梅の花も、いつしか移ろう時節を迎えたようです。歌の中にある「目かれぬ」には、目を離すという意味の「離れ」に、花が衰え行くという「枯れ」が響かされています。ずっと目を凝らしていたつもりでも、花は少しずつ色あせ、やがて散っていきます。それは、ちょっとよそ見をした間のような「いつの間にか」の時の移ろいなのかもしれません。

「とくに意識しなくても進む様子」を表す時に、「自然と」「自然に」という言葉を使います。現代の若者で言えば「普通に」でしょうか。古くから用いられる「自ずから」「自ずと」「ひとりでに」などと同じような意味合いです。何の不思議もないことを喩えるのに、「川を下れば自ずから海、川を上れば自ずから山」という言い回しがありますが、花は咲けば当然のように散り、季節は自然と次へと移りゆきます。

それは、人の一生も同じでしょう。人間は生まれてから日に日に成長し、年々に年を重ねていきます。とどまることはありません。先日、年配の檀家さんの方が「人生は長いようで短い。短いようで長い」と仰っていました。川に喩えれば、流れの速い日もあれば、緩やかな日もあり……緩急を繰り返しながら、大いなる海を目指しているのでしょうか。

ちなみに、川の深くよどんだところを「淵」、浅くて流れの速いところを「瀬」と言います。これは例えば、

世の中は
何か常なる
飛鳥川
昨日の淵ぞ
今日は瀬になる

（『古今集』読人不知）

（この世の中では、常に変わらないものなどあるのだろうか。いや、ありはしない。飛鳥川の昨日は淵であったところが、今日は瀬に変わっているように）

という和歌にも詠み込まれているように、「淵瀬」は「世の中の移りやすく無常なこと」を喩えています。「昨日」「今日」「明日」（飛鳥川）という悠久の時の流れは、「淵」や「瀬」に差しかかって勢いを変えながら、絶えまなく進み続けているのです。

川の上流と下流では景観が異なるように、人間もまた年齢に応じた表情を見せるようです。若い頃と年を重ねてからの違いについて、兼好法師（一二八三頃～一三五一以後）は次のように語っています。

若い時は血気あふれていて、心はすぐに動揺し情欲も多い。身を危険にさらして砕けやすいのは、珠を速く転がせるのに似ている。

春の訪れと共に紅梅が満開を迎える

折り折りの記 (127)

高尾山麓梅林の花見かな

波多野　重雄

今年も高尾山麓の梅林は観梅客で賑わった。

福岡県太宰府政庁跡に隣接する坂本八幡宮は大伴旅人邸で、令和の元号の典拠となった。万葉集の「梅花の宴」が催された場所である。

私は若い頃、大宰府に遊び商店街のお菓子屋さんに、薩摩の西郷隆盛と僧月照が幕府に追われ、此のお菓子屋さんの二階に隠れ宿としたのを店のお母さんに聞いて覗き見をした。そして、熟れた庭の柿をご馳走になった。その後、錦江湾で二人は入水自殺、西郷さんは救助され維新に活躍された。

万葉集の「赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山徒歩ゆか遣らむ」と防人の夫を見送る妻の送別の哀歌が偲ばれる。

（高尾山健康登山の会会長）

春遊八海山

厚木市　荒井　一雄

陽光融深雪
作清流飛泉
香風慰登坂
滑降復回旋

雪解けの
水はコブシの花かをる
谷間をきよき早瀬とながる

春、八海山に遊ぶ

陽光は深雪を融かし、
清き流れ・飛泉(滝)と作す…
コブシの花香る風は、
登山の疲れを慰め、
滑降(春山スキー)復た
回旋(回転)す…

麗しいものを好んで無駄遣いをしたり、そうかと思えばこれを捨てて出家をしたり……勇む心で人と争い、心に恥じたりうらやんだりして、心は日々変化している。情事にふけり恋に夢中になって、行動は思い切りが良いので、そのために将来を水の泡にしたりもする。

命を失う事件に心がひかれて、長生きも願わない。好きなことに引きつけられて、後世までの語り草となってしまうこともある。身を誤るのは、若い時の仕業である。

それに対して、老人は精神も衰え、大まかで淡泊なので動揺することがない。心は自然と落ち着き、無益なことをしない。わが身を労って心配事もなく、人に迷惑をかけないようにする。

老いてから智慧が若者に勝っているのは、若者の容姿が老人に勝っているのと同じである。

（『徒然草』一七二段）

兼好によれば、人は年を重ねるごとに自然に落ち着いていくそうです。まさに「年の功」ということでしょう。外見が少しずつ変わっていくように、智慧（真実を見極める能力）という内面が徐々に備わっていきます。これは、意識することのない「自然な流れ」なのです。

栴檀の林に
入る者は
染めざるに衣
おのずから香し

（『太平記』）

（白檀は香りが強いので、その林に入ると自分の衣服に香気が染まる。同じように良い環境に身を置く者は、自然に良い性質や習慣が身に付いている）

梅の花は風に散っても、その気高い香りは、いつまでも忘れることはありません。自然と心の奥深くに沁み込んだ香気を胸に、今年も桜を眺めたいと思います。

（栃木北部教区普濟寺）

前貫首・山本秀順大和尚ご命日

二月四日は、前貫首・山本秀順大和尚の御命日であります。歴代先師墓地において、懇ろに御回向を致しました。

大和尚は平成八年二月四日、世寿八十四歳にて御遷化されました。

日差しあふれる穏やかな陽気の中、亡き大和尚の御冥福を祈り、墓前に香を手向けました。

境内に響くは「福は内」の大音声（だいおんじょう）

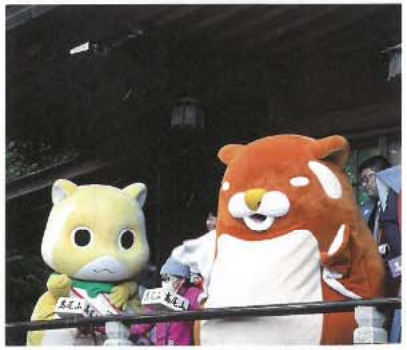
高尾山節分会追儺式

一月三日（月）

一心に祈る玉鷲関と片男波親方

無病息災を願い「福は内」の大音声

残念ながら参加できなかった北島三郎さんの像を囲む北島ファミリーの皆様



松姫マッピー（左）と「ムサさび～ず」のムッちゃん（中）とムサ尾

鉄作家のチャーリー磯崎さんと女優の丘みつ子さん　八王子車人形の西川古柳座と八王子芸妓組合の皆様

タレントのおののかさん、スター・錦野旦さん、落語家の柳家小さん師匠も「福は内」

昨年に活躍された人気者達から福豆を頂こうと、大勢の人が大本堂前に押し寄せる

祝・節分会記念登山

当山筆頭参与 伊奈稔様 六十回修行達成

当山筆頭参与である、伊奈稔様が、本年の節分会をもって、六十回修行を達成されました。

伊奈様は幼少の頃から高尾山とご縁がありましたが、深く御縁を結んだのは、六十年ほど前の事でした。

当時伊奈様は御結婚を機に「割烹・伊奈喜」の婿養子となった頃で、一念発起の証として、昭和三十四年の大晦日から、二年参りを始めたとのことです。節分会にもその頃から参加されるようになりました。伊奈様はその後、高尾山参与となり、高尾山慶賛会においては、長年にわたって事務局長を務められました。

伊奈様は節分会に際し、特別な色の「記念袴」を奉納されております。それは、五十回修行の方は赤色、五十五回修行では銀色、六十回修行では金色という袴です。

また、今回貴重な写真をお持ち頂きました。それは昭和三十年頃に撮影された節分会の集合写真です。

伊奈様におかれましては、六十回修行達成をお祝い致しますと共に、今後益々一層の御活躍を御祈念申し上げます。

大本堂前で撮影されていた昔の節分会

金色の袴を着る伊奈参与

現在では仁王門で記念撮影が行われる

一隅を照らす

シャンソン歌手　友納あけみ

寒い、寒い日が続いています！冬晴れの日が続いてたせいで、このところ、きりっと冷たい空気が広がり澄みきった空の向こうに真っ白に雪化粧した富士山がくっきりと顔を見せてくれています。毎朝、思わず拝んでしまいます（笑）富士山はいつも不思議なパワーを与えてくれます。

巷は肺炎騒ぎ！見えない正体不明のウイルスの不安に世界中が重く覆われています。皮肉な話ですが改めて国籍や民族を越えて、私達はひとつの同じ星に住む、同じ人間なんだと思い知らされます。ウイルスの前では肌の色も関係ない！各々の国の利益をとやかく争ってる場合ではなく、私達が立ち向かわなくてはならない相手は同じ人間同士ではないのだと…

真っ暗な宇宙の中で地球は奇蹟のように浮かぶ美しい小さな星だそうです。それなのに、その地球を壊したり、傷つけたり、奪いあったり、この騒ぎも、あまりの人間の所業に対する警鐘のような気がしてなりません。当たり前のことですが、丸い地球の空気は繋がっています。何処で何が起こっても「対岸の火事」と言ってる場合ではない！こういう時こそ、国籍や国境を越えて、助け合い、支えあい、新しい繋がりの種を育て、早く穏やかな日々を取り戻したいものです。

今年、母の従妹から頂いた年賀状に「一隅を照らす」という言葉がありました。アフガニスタンで亡くなられた中村哲さんの座右の銘だったそうです。「この地球の生きとし生けるもの全ては各々が各々の光を持っている。そして、その強さ、大きさは違っても、各々が各々の光を照らすことはできるはずー」と、添え書きがしてありました。私も精一杯、今、出来ることを粛々とやって行きたいと思っています。

高尾山の昆虫 125

ムラサキシジミ

三月といえばまだまだ寒く、一部の種を除いて成虫に出会うには難しい時期です。

そんな中でも木の芽時になると、ぽっと現れる、いたいけな蝶たちがいて、その一つがムラサキシジミ（紫小灰蝶）となります。

青紫色が鮮やかな本種は、年に三～四回発生し、成虫越冬することが知られています。

一般的に人間は別として、動物・鳥・虫ではオスの方がメスより派手で色彩豊かな場合が多く、本種のオスも翅は広域に亘り紫色の発色が出て綺麗ですが、メスは紫がかった部分は若干少ないものの青味がより強く感じられ、オス以上に印象的です。

変った生態として、幼虫は蜜を分泌してある種のアリに与える代わりに護衛をしてもらうという共生関係にあるようです。

春の訪れる直前の暖かな日に、翅を広げて日向ぼっこをしているように葉に止まっている本種に出会うと、思わず歓声を上げることでしょう。

ただあくまで翅を開いた状態の場合で、翅を閉じてしまうと極めて地味な色合いで、まるで別の種と感じるか、或いは枯れ葉に見えると思います。

このジキルとハイド氏のようなギャップが本種らしいですね。

（文 松島　孝　撮影 上村　雅昭）

観音菩薩の宗教 ㉗

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

二十一ターラー菩薩を讃える経典（その2）

前回はチベットやモンゴルで隆盛を見た『二十一ターラーへの讃』（以下、讃と略称）の概略を述べた。讃はターラー菩薩の功徳を二十一の詩節によって説いた讃歎文である。讃は後に二十一尊のターラーの変化身の根拠となったが、讃の本文自体はターラー菩薩の有り難さや徳目・能力の称讃に終始し、各ターラーの名称を挙げることはなかった。それに対し後に書かれた文献は、二十一の詩節で語られるターラーをそれぞれ別の姿の尊格として特定の菩薩名を与え、身体的・図像的特色を説明した。それがセットとしての二十一ターラー菩薩の根拠となった。

二十一ターラー菩薩名の伝承には、以下の二系統がある。

ひとつはスーリヤグプタ（Sūryagupta）の伝承である。スーリヤグプタの伝記は詳しく伝わっていないが、ターラナータによれば七世紀後半ごろのインドの学僧と推定される。スーリヤグプタは、讃に対する注釈やターラーの供養法を記したサーダナ（sādhana）を遺しているが、伝存するテクストはチベット語のみである。これらはスーリヤグプタ学派とか、スーリヤグプタを伝えた学者の名を取ってアティーシャ流などといわれている（以下ではSと略称）。アティーシャの転生者のザナバザルはこの系統を受け継ぎ、現在モンゴルに伝存するザナバザル造の二十一ターラー像もそれに従う。

もうひとつの伝承は、チベット仏教古派のニンマ派（rNying ma pa）が伝える名称で（以下ではNと略称）、十八世紀の同派の学者ジクメ・リンパ（'Jigs med gling pa）の讃への注釈『宝の花瓶（gTer bum）』などを典拠としている。

今回の拙論ではチベット文を底本として讃の和訳を試み、併せてSやNに記されたターラー菩薩名を加えることにする。和訳に際してはサンスクリット語原文（Willson, In Praise of Tara - Songs to the Saviouress. Wisdom Publications. 1986. pp.113-166）に当たり、前回紹介した種々の英訳を参照した。また、現代モンゴルで口語により知られているモンゴル語訳も参考にしたが、今回は古典的モンゴル語訳の検討は行い得なかった。

梵蔵蒙漢四カ国語木版本『讃』に見るスーリヤグプタ流のターラー・トゥラ・ヴィーラーの図像（Willson　前掲書　p.124　より）

詩節は八音節四行を一組とするシュローカの形式を取り、ここでは各詩節の冒頭に番号を振った。番号は詩節の順番と詩節内の行数を示す。最初の（0）は讃の原文にはなく、チベットの翻訳者が付加したターラーへの帰敬偈であるが、チベットやモンゴルではこの偈を合わせて唱えるので以下に和訳した。また、筆者の補訳は訳文中の〇に入れ、訳文の次には適宜、筆者の解説を記した。

（0.1）オーム。尊き女性、聖なる女性（たる）ターラーに敬礼す

（0.2）ターラーへの讃。疾き女神、女丈夫よ

（0.3）トゥッターラにより恐怖を滅ぼす女性

（0.4）トゥレーによりすべての利益を与えるターラー

（解説）（0.1）「オーム（om）」はインドの聖なる音で、仏教のみならずヒンドゥー教やブラフマンの宗教など広く用いられる。漢訳仏典などでは「唵」と音写される。『光明真言』の冒頭に唱えられる「おんあぼきゃ」の「おん」のもこの音であり、日本で多くの知る仏菩薩の真言にも「おん」が唱えられる。薬師如来の真言の始めの「おんころころ」や地蔵尊の「おんかかかび」や観音菩薩の「おんあろりきゃ」の最初の音がそれである。殺生戒を犯し世間を震撼させたオウム真理教の「オウム」もこの音に由来する。

「尊き」はチベット語「ジェツン（rje btsun）」の和訳で、男女ともに用いられる。モンゴル初の活仏の名跡「ジェ（プ）ツン・ダンバ」も同じ語である。

（0.2）の「疾き女神」とは、ターラー菩薩が衆生の願に応じて素早く救済にあたることを指す。「女神」のチベット語原語「パクマ（phags ma）」は「尊い女性」「貴族の女性」を意味するが、ここでは意訳した。（0.3）（0.4）の「トゥッターレー・トゥレー」は讃の本文中に出るターラー菩薩のマントラ（真言）からの語。チベット語原語では「トゥッターラ・トゥレー」とあるが、ここでは校訂・訂正した。次の（1.1）からが讃の本文である。

（1.1）讃歎（する）。ターラー、疾き女丈夫よ

（1.2）御眼は閃光いかずちのごとし

（1.3）三界の主（の）顔の涙より生まれし

（1.4）開ける花より生まれし女性

（解説）（1.1）の「讃歎（する）」のチベット語は「チャクツェル（phyag 'tshal）」で、名詞でも動詞でも用いられる語。ターラーはサンスクリット語で、チベット語では「救済する女性」を意味するドルマ（sgrol ma）と訳される。ドルマはチベットやモンゴルで一般女性の名前として好まれ用いられてきた。安蔵の漢訳では、「救度速勇母」とされている。

（1.2）「御眼」の原語は「チェン（spyan）」で、観音菩薩のチベット語「チェンレシ（spyan ras gzigs）」の中の語と同一である。漢訳では「目如刹那電光照」とある。

（1.3）「三界の主」はサンスクリット語でトライローキャ・ナータ（trailokya-nātha）で、欲界・色界・無色界の支配者を表す。SもNも、これを観音菩薩と捉えている。「顔の涙より生まれし」は、サンスクリット語でヴァクトラ・アーブ・ジャ（vaktrāb-ja）で直訳すれば「顔の水から生まれた」を意味する。SもNも、これを観音菩薩が慈悲のために流した涙と解釈している。漢訳では「三世界尊蓮華面」。

（1.3）から（1.4）は、ウイルソンなどの英訳に従い一文として解釈した。

（1.4）の漢訳は「従妙華中現端厳」である。

モンゴル語訳では（1.1）から（1.4）の文末に「汝（よ）」を意味するター（ta）が加えられ、讃歎の対象が二人称としてのターラーと解釈とされている。

Sの注釈によれば、この詩節に讃えられるターラーは「疾き勇猛なるターラー」（sgrol ma myur ma dpa mo）もしくは「いと勇猛なるターラー」（sgrol ma rab tu dpa mo）で、サンスクリット語に遡って翻訳すると、ターラー・トゥラ・ヴィーラー（Tārā Tura-vīrā）もしくは、ターラー・プラヴィーラー（Tārā Pravīra）となる。Nの注釈によれば、「疾き勇猛なるターラー」である。

次号以下、讃の和訳を行っていきたい。

二月十五日（釈尊入滅の日）
高尾山釈尊涅槃会

お釈迦様が入滅されたと伝わる二月十五日に、高尾山上において釈尊涅槃会が行われました。

有喜苑・仏舎利塔内において法要が営まれ後に、書院内に飾られた**「高尾涅槃図」**の前でお釈迦様の遺徳を偲び懇ろに御供養されたました。

高尾涅槃図には、お釈迦様が入滅された時の弟子達、動物達の悲しむ様子が描かれており、紅葉の木や、天狗、ムササビなども登場しております。

お釈迦様の遺徳を偲び懇ろに供養されました

ねはん会の集い（二月七日）

主催　八王子市仏教会

去る二月七日、八王子市いちょうホールに於いて**『ねはん会の集い』**が行われました。

午後一時より、八王子市内各宗派の僧侶による涅槃会法要、午後一時半からは、浄土宗光琳寺副住職の井上広法先生による**『お釈迦様のご生涯～点と点をつなぐ～』**と題した法話の講演が行われました。

その後、密厳流遍照講高尾山支部薬王院の皆様による「不動和讃」他、各宗派の御詠歌及び讃仏歌が奉詠されました。

各宗派の僧侶により営まれた涅槃会法要

密厳流遍照講高尾山支部の皆様による奉詠

井上広法先生による法話

初甲子大黒天祭（はつきのえね）

一月二十二日（水）

クコの木御奉納者御芳名

相模原市　鳥井　富喜子
八王子市　坂本　義男
〃　坂本　幸子
〃　安原　美和子
〃　川寺　富美子
〃　山下　タカ子
〃　安藤　亮治
〃　臼井　啓能
〃　青木　和男
〃　青木　智恵子

（順不同・敬称略）

初午福徳稲荷祭（はつうま）

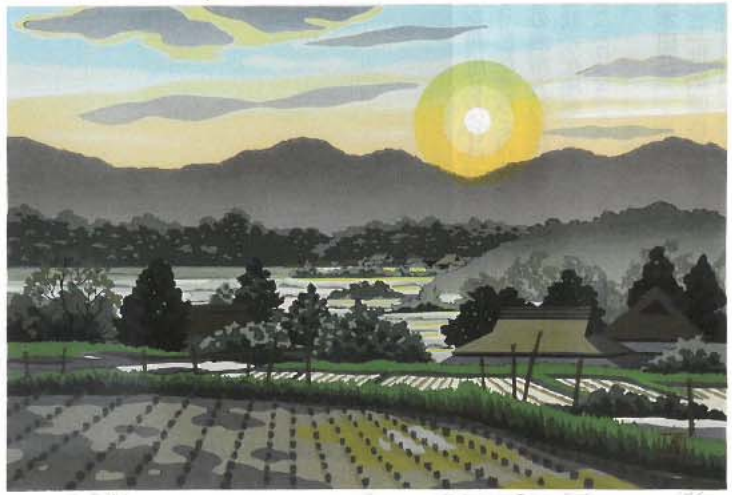
二月九日（日）

去る二月九日、飯縄権現堂（御本社）脇の福徳稲荷社において高尾山初午福徳稲荷祭が行われ、家内安全・身体健全・商業繁昌・五穀豊穣などが祈願され、参列の御信徒の皆様と共に祈りが捧げられました。

初午の法要は、京都伏見の稲荷神社の祭神が、和銅四年（七一一）の二月最初の午の日に降臨し鎮座されたと伝わるため、毎年初午の日に行われております。

院内散歩 37

～薬王院の展示物～



木版画　『大原朝光』　作・井堂雅夫

高尾山年代記 ③

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

二世源廣　南北朝の争乱の渦中

醍醐寺の僧俊源が永和元年（一三七五）に来山し、山中で修行の際飯縄大権現を感得。異人が刻んだというその尊像を祭祀して高尾山の中興を果たしたと伝えられる。

高尾山二世源廣

天保四年（一八三三）の「由緒書」は、俊源の寂年を永和四年（一三七八）十月四日のこととしている。その跡を承けたのは二世源廣となっている。

しかしながら、現在のところ源廣の動向を知る手がかりは、その晋山から二〇〇年が経過した時期の史料となる。源廣の名の初見は天正五年（一五七七）・一七年・一八年付とひとまとまりになった八世源質が九世源恵へ授与した印信（秘法伝授の証書）に添えられた血脈で、「有喜寺開山俊源僧都」の次にその名が記されている。

高尾山の動向が歴史上明らかになってくるのは弘治三年（一五五七）の七世源智印信や永禄三年（一五六〇）の北条氏康寺領寄進状の時期からである。したがって、それ以前の歴史については、高尾山を取り巻く周辺の状況、すなわち中古以来の八王子周辺の歴史を振り返ることにより、高尾山の来歴をイメージする外ない。

武州高尾山の「武州」、すなわち武蔵国は埼玉県と東京都、神奈川県川崎市の全域、横浜市の大部を併せた広い範囲に及ぶ。この旧国の地図に河川の位置を重ねると、旧利根川、荒川、多摩川という三つの水系があり、特に葛飾・足立の両旧郡の細長い領域に顕著に表れているが、その水系に沿って開発が進んだことがよく分かる。

武蔵国の国府は、旧国の範囲を考えるといささか南に寄り過ぎている感もあるが、多摩川水系に沿う現在の東京都府中市に在った。一〇世紀には国府の西方に朝廷へ貢納する馬を飼育する「牧」が存在した。この頃、武蔵国には武蔵七党という在地武士団が割拠していたが、その内の横山党は町田市から八王子市東南部にかけての多摩丘陵沿いに勢力を伸ばした。

古代の関東にあっては、まず水系周辺の湿地帯に耕地が開発され、その後背地である台地上は水利の問題があって長く荒野として放置されていた。低湿地の次に開発が及ぶのは山裾の谷筋から湧く水を利用した谷戸田である。したがって、武蔵国府の西南方の丘陵沿いを根城に在地勢力が蔟生することになった。

船木田荘

二一世紀頃になると武蔵国周辺部では公家・大寺社の荘園開発が進む。八王子市中山で地中に埋納された経筒から「武蔵国西郡船木田御荘」と記された経典が発見されている。ここに「船木田荘」の名が確認されるとともに荘園の歴史は経典に記された仁平四年（一一五四）よりもさらにさかのぼると考えられ、在地勢力が開発した耕地が藤原摂関家へ寄進されたと考えられる。船木田荘は関白藤原忠通領から娘の皇嘉門院領を経て、藤原五摂家の九条家領として相伝されてゆく。

この寄進地系荘園というのは、新開した耕地を、特権を付与された公家・大寺社の所有とすることによって非課税地とし、荘園主への貢納はあるにせよ開発者自身は荘園の管理者として利益を享受するという仕組みである。

金比羅物見台からの眺望
眼下の東国でも南北朝の争乱が繰り広げられた

船木田荘の領域は八王子市域から東方の日野市西部（豊田・平山）に広がり、その西南の山間に入ったところに高尾山が位置することになる。船木田荘は本荘の椚田、新荘の長房に分けられる。これは椚田・散田・片倉が林業荘園という、当初は耕地開発ではなく山林からの収益を得る場に位置付けられ、つづいて浅川、川口川、湯殿川流域の耕地開発へと展開してゆく過程として理解されている。

建暦三年（一二一三）、鎌倉幕府の侍所別当和田義盛は執権北条義時を討つべく挙兵（和田合戦）。この時、横山氏は義盛方に付いたため、敗北によって滅亡。横山氏の旧領は京の学者の家の出で源頼朝の側近に転じた大江広元の所領となる。以降、高尾山最寄りの椚田の地はその子孫である長井氏が戦国期まで長く領有することになる。

南北朝の争乱と鎌倉府

源頼朝によって幕府が開かれて以来、関東の動向は鎌倉に左右されることになる。元弘三年（一三三三）に幕府が滅びた後も足利氏の一族が在府してその状況は続いてゆく。

建武の新政も束の間、足利尊氏とその影響力の抑制を図る新政権との関係は悪化した。北条氏遺児の反乱を鎮めるため鎌倉に下向した尊氏に対し、追討軍が差し向けられ、尊氏は叛逆を決心する。その後、京都をめぐる激しい争奪戦の結果、後醍醐天皇は吉野へ落ちて南朝を構え、尊氏は光明天皇を擁して北朝を立てた。ここに二人の天皇が並立するという前代未聞の事態となる。その後の果てしない争乱は、高尾山縁起が「叔世辟多し。諸魔まことに繁くいたずらになす」と表現するにふさわしい時代の様相であった。

貞和五年（一三四九）、鎌倉には尊氏の子基氏が入った（鎌倉公方）。翌観応元年、尊氏の弟直義と尊氏側近の高師直の対立に発し、各地で両派の抗争が惹起する（観応の擾乱）。関東の地でも共に基氏の側近であった直義派の上杉憲顕と高師冬の間で戦いが繰り広げられた。

一連の騒擾は最終的に尊氏が制圧するが（一三五二）、今度は新田義貞の遺児義興・義宗ら南朝勢力が上野国（群馬県）に挙兵、鎌倉へ攻め上り、武蔵金井原、小手指原など多摩周辺でも合戦が繰り広げられた。義興は延文三年（一三五八）に多摩川矢口の渡しで謀殺され、関東での南朝方の動きは一時沈静化する。その年、尊氏が死去。しかし、応安元年（一三六八）、再び下野国（栃木県）、武蔵国で南朝に呼応する在地勢力が蜂起するなど関東の政情は不安定で、高尾山が中興されたと言われる時期は乱世の只中であった。

それに先立つ貞治二年（一三六三）、観応の擾乱により越後国（新潟県）に逼塞していた上杉憲顕は、基氏に請われて補佐役である関東管領に復帰していた。この憲顕の系統が同族の中でも居住地を冠して山内上杉氏と呼ばれる。以後、関東の地は鎌倉公方と関東管領を務めた上杉一族の動向に強く影響を受けることになる。

源廣の時代

武蔵守護であった山内上杉氏の配下に、後に滝山を本拠とする大石氏の祖先がいた。武蔵守護代を務めた大石遠江入道の活動が康暦元年（一三七九）から至徳三年（一三八六）の間、史料として残る。そして、椚田郷を所領とした長井氏も、道広の名が永和四年（一三七八）に鎌倉府の引付頭人（裁判事務部署の長）として見える。

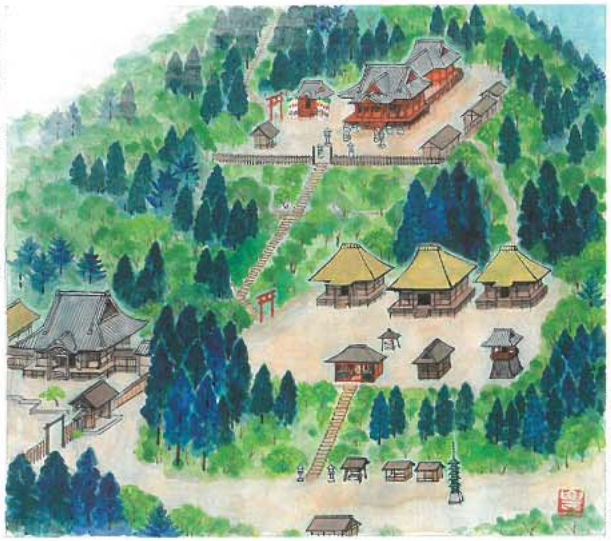
さて、康暦二年（一三八〇）、下野国の名族宇都宮氏と小山氏の間に抗争が発生した。小山氏は二代鎌倉公方氏満の討伐を受けるが、元中四年（一三八七）にかけて再々の挙兵を繰り返した。氏満は関東の諸将を召集したので、長井氏の領民もまた北関東へ従軍したであろうことが偲ばれる。二世源廣在住とされる時期の出来事だったが、源廣自身の動静としては天保四年の「由緒書」に明徳三年（一三九二）の寂年が記されるのみである。この年、南北朝の合一成る。

《参考文献》七宮滓三『関東管領・上杉一族』（新人物往来社、二〇〇二）、『新八王子市史』通史編2中世（二〇一六）

高尾物語 23

享保期の高尾山

絵・橋本豊治



飯縄権現堂（御本社）
享保十四年（一七二九）本殿建立
享保一五年（一七三〇）幣殿・拝殿建立
宝暦三年（一七五三）幣殿・拝殿再建（現存）
文化二年（一八〇五）修築され現在の姿となる

高尾山は、江戸時代中期の享保年間（一七一六～一七三六）頃、飛躍の時代を迎えることとなりました。

この時代には、江戸幕府による支配体制が安定し、江戸周辺の経済圏が活性化することで、庶民による寺社信仰が盛んになりました。

高尾山においても、「病気平癒」や「火伏」・「蚕守護」等、現世利益を求めて、多くの人々の信仰を集めたことが『永代日護摩家名記』という史料によりわかっております。

享保期には、現在の飯縄権現堂（御本社）の本殿が享保十四年（一七二九）に建立されました。

その後災害などで何度か修復され、現在の拝殿、幣殿・本殿の三棟が連結した「権現造り」という形式となりました。

同じ失敗
くり返さない
為に反省
くり返す

いけばなの心①

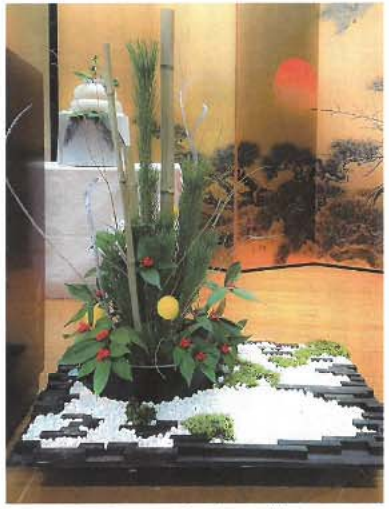
華道教授　佐藤　宗明

この作品は新年に薬王院の有喜閣大広間に展示したもので、松と竹、千両を主題にしています。

松は長寿、竹は繁栄の象徴、千両は縁起物として伝えられており、新年に相応しいおもてなしの花としました。

日本人は四季の変化にともない変化する草木に強い生命感を感じ取り、自然と共生する生活を営んでいました。

その中で、常に緑色を絶やさない常緑の木々に特別な意味を見出し、信仰していた事がいけばな発祥の一要因と言われています。



新年の門出を祝ふ花

花材：若松　竹　千両　ピンポン菊　柳（金塗）
雲竜柳（銀塗）　苔　白砂

おはなし散歩道

タヌキ神社

町田市　大澤桃代

ある神社の縁の下に、タヌキの夫婦が住みつきました。神主は「ポン太」「ポン子」と呼んで可愛がっていました。

山間の寂しい村です。二匹がきて、神主は毎日が楽しくなりました。

ポン子は愛想のよいタヌキです。

「ポン子、ポン子」と呼ぶと飛んできます。キューンと甘えて鳴けば、人間はつい食べ物をあげてしまいます。

けれど、時には子どもに叩かれたり、酔っ払いにからかわれたりしています。でもポン子はめげません。喜んでくれる人の方が多いからです。

一方のポン太は人が苦手で、神主にさえろくに顔を見せません。参拝者の姿があると縁の下に隠れます。作物を盗んで追われたことがあって、人間が怖いのです。

二匹は仲のいいタヌキです。ポン子はエサを貰うと、縁の下に持って行ってポン太と分け合って食べるのです。細かった体は、丸々と太り、毛艶も良くなりました。元々器量よしのポン子は、いっそう可愛くなりました。

神主はポン太が気になっています。二匹がきて三ヶ月ですが、未だポン太の元気がありません。時々、山へ出かけることも気がかりです。山に帰りたいのかもしれない、と思います。ポン太がいなくなればポン子も出て行くでしょう。神主はやきもきしています。

「ポン太やポン子や」

神主は呼びかけました。ポン子がすっ飛んできます。けれども、ポン太は縁の下で丸くなったきりです。小さく頼りなく見えます。

することがないからでしょうか。

「おまえたちがきて、参拝者がふえたんだよ」

神主はお団子を差し出します。甘辛い匂いが縁の下に届き、ポン太が顔を上げました。

「桜が咲くと大勢人がくる。よろしく頼むな」

社務所のそばの桜が、ほころび始めています。好物の団子につられたのか、ポン太がふらふら出てきました。

とたん、ポン太が足を止めました。参道に人がいたのです。ポン太は逃げるように桜の木にかけ登りました。

ポン太は、桜のてっぺんにしがみついています。夕方の風に枝がガサガサ鳴っています。

神主とポン子が桜を見上げます。ポン太は身動きしません。登ったものの下り方がわからないようです。

その人は一心に手を合わせています。

ようやくポン太は、枝につかまり、恐る恐る下りはじめました。

半分ほど下りた時です。神主があっ！　と思った瞬間、ポン太は地面に落ちて尻餅をつきました。

どしん！

ジャッと、砂利が小さな音をたて、桜の蕾が風に乗り、参拝者の頬にはりつきました。

「ありがたい。神さまのご加護があるぞ！」

その人は目を輝かせました。お詣りの時、砂利が鳴ったり花が舞うのは、縁起がいいといわれています。

神主は桜の木に走り、ポン太の頭をなでました。ポン太もポン子も嬉しそうです。

それからのポン太は、参拝者に花びらを投げたり砂利を鳴らしたり、すっかり元気になりました。神主も参拝者も、ご利益には違いないと笑っています。

神社は「タヌキ神社」と呼ばれるようになり、神主はほっと胸をなで下ろしています。（完）

（挿し絵・小出　茂）

高尾山仏舎利塔 結縁牌懸仏のおすすめ

高尾山にはタイ王国・王室より授けられた、大聖釈尊の真身骨を奉安してある仏舎利塔があります。そしてその周りを囲むように建立された百観音お砂踏霊場がございます。

御信徒各位には、釈尊との御勝縁を結ばれますよう、仏舎利塔内に結縁牌懸仏（かけぼとけ）をご納仏されることをお勧め申し上げます。

この結縁牌懸仏は、夫々のご家族の先祖代々供養の為に、あるいは講中、参拝団の物故者慰霊の為に、お釈迦様と御信徒の皆様との尊いご結縁のしるしとして、霊名あるいは施主のご芳名を刻み、仏舎利塔内壁面に奉安し、大聖釈尊の聖骨と共に幾久しく供養されるものであります。

御納仏冥加料
一体　拾万円也

尚、お申し込みの方には「御納仏回向之証」をお授け致します。（左の写真）

特別精進料理「そば御膳」のお知らせ

本年も毎年ご好評を頂いております、「そば御膳」を実施しており、旬の食材を生かした料理を気軽に味わっていただけます。

ご予約を承らず御案内しておりますが、食材に限りがありますので早めの来山を御願い致します。

期　間　九月下旬まで

営業日　平日のみ（団体予約多数の場合は実施しない場合もありますので御了承下さい）

価　格　千九百円

※ただし、四月二十五日～五月六日の大型連休期間につきましては、価格や実施日等が変更になる場合もありますので事前にお問い合わせ下さい。

特別精進料理「そば御膳」　1,900円
（11:00より受付開始）

※営業日の詳細につきましては、ホームページをご覧頂くか、お電話で御照会下さい。
※料理の内容は季節や仕入れにより変わります。

お護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

お護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を済まされた方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納するという習慣がありました。今日でも、お杉苗奉納は続いており、参道の大杉原には一年間掲示される杉苗奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。

高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ることを厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然を守り、また大自然から守られつつ、共存共栄し、本日の景観を造りあげてきたということを、忘れてはならないと思います。

尚、毎年**十二月十日**までに、**一万円以上**を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

第十一箇度 相州大山登拝修行のご案内

本年も当山恒例の相州大山登拝修行を執行致します。

皆様お誘い合わせの上、一人でも多くのご参加を、心よりお待ちしております。

日　時　五月中旬予定
※行程の詳細は来月号に掲載します

お問合せ…大本山高尾山薬王院大山登拝事務局
TEL〇四二―六六一―二二五(代)

御奉納御礼

八王子市にお住まいの増山進・史子御夫妻より、このたび新たに檜扇を御奉納頂きました。

檜扇とは、御護摩供修行の際に修法する御導師が、護摩壇の壇木に点火された浄火を、益々大きな炎にして燃え盛るようにする為に使用されます。

増山様におかれましては、平成二十七年にも同様に檜扇を御奉納頂いており、重ねて感謝申し上げます。

高尾山　季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
菜虫化蝶
「なむしちょうとなる」
三月十五日～三月十九日頃

菜虫とは、大根や蕪などの葉を食べる青虫のことで、この時期に蛹から羽化して蝶となる。

春といえば、穏やかな陽気の中、モンシロチョウなどが飛び交う光景が思い出されます。

今月の風物詩
蛤

日本人にとって貝は、縄文の昔からの食材であります。

特に、蛤の殻は同じ貝のものでないと、両方が綺麗に合わないことから、「夫婦円満」の縁起物とされてきました。

ひな祭りや結婚式の際にも、良縁を願って食されます。

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「やぶ椿の公園」

八王子市 栃谷玲子 様

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

八十六段　焦らないこと

「急いては事をし損ずる」という言葉にもありますように、焦っていては何事も失敗しやすいものです。予期しない出来事が発生した場合、どうしても動揺してしまいますが、まずは心の中で「焦らない、焦らない」と思ってみましょう。

◎健康登山の皆様へ
高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの心温まるお話を聞かせて頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※　投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ…百円

高尾山報助成金志納者御芳名（順不同・敬称略）

伊勢原市　佐々木　晋介
さいたま市　鬼頭　原良
伊東市　大江　弘
熊谷市　丸山　進
狭山市　富田　衛
八王子市　松下　重成
〃　峯尾　洋一郎
〃　田中　スエ
〃　峰尾　哲也
〃　石井　征二
〃　吉田　喜平
入間市　北原　和男
佐野市　荒居　幸子
中央区　冨澤　淑枝
八王子市　光雄　晃弘
〃　石田　貞夫
〃　秋山　論
江東区　掛川　昌通
青梅市　梶野　嘉穂
羽生市　増田　久雄
さいたま市　水岡　健二
富岡市　大手　邦裕
足利市　荻野　キヨ
八王子市　冨永　博士
あきる野市　執行　晃弘
新座市　彰山　粧麗
浜松市　竹内　恒夫
八王子市　佐々木美津子
前橋市　櫻井　典子
相模原市　大貫　陽子
長岡市　猪川　キクイ
八王子市　笠原　清子
仙台市　佐々木　茂
福生市　野中　数一
日野市　岡田　志美子
伊達市　阿部　マン
八王子市　長島　正江
新座市　高橋　久子
潟上市　照　明寺
邑楽郡　八山　光三郎
立川市　正楽　院
八王子市　小林　ヒサ子
熊谷市　妻沼飯縄講
〃　石井　淳
茅ケ崎市　椎野　佳子
足立区　中山　恵司
邑楽郡　松村　静雄
北区　山口　勝一
川口市　八木橋　弘子
深谷市　小内　健次
高尾山健康登山者一同

高尾山報助成金
御志納のお願い

当山では、大護摩修行や星祭り等により御縁を結ばれた御信徒様に、高尾山報を送っております。

引き続いてご愛読されますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

厄年を過ぎた御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年・一年を
七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを
八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を
九十才を過ぎたなら
一日・一日を
気を付けられ
日々を大切に
圓満にお暮し下さい

当山では皆様の（身体健全（寿命長久））を祈念して

福壽圓満の
御護摩を
お申し受け致しております。

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中（山上十一丁目茶屋前第十七番札所）で合流し、いっしょに巡拝致します。

A、不動院から琵琶滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルを利用する。

（琵琶滝周辺のお大師様は巡拝できません。）

※ケーブルを利用する場合、代金は自己負担になります。

日　程　五月十一日（火）

行　程　山麓不動院→琵琶滝→仏舎利塔
→本堂（護摩修行）→坊入（昼食）
→下山（一号路）→不動院着（法楽）
→解散

参加費　五千円（昼食代、保険料含む）

集合場所　山麓不動院（八時半集合）

申込方法　ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。

締め切り　五月八日（金）

〒一九三―八六八六
八王子市高尾町二一七七
大本山高尾山薬王院　八十八大師係

＊電話でのお申込みは承り兼ねますのでご了承下さい。

＊申し込み締切り後、請け書（行程表・持ち物等）をお送り致します。

登山だより

■四月行事日程■

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)

八日、二十日
弁天様御縁日

一日
滝びらき

七日、十三日
御詠歌勉強会
(十時山麓不動院)

八日
花まつり(仏舎利塔)

二十五日
月例写経会
(十三時山麓不動院)
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
(十二時半山麓不動院)

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)

○御本尊様の日々の御加護に感謝し、百味のご供物を捧げて供養する法要です。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。

尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。

御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間

(11月1日～4月14日まで)

午前6時00分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山春季大祭

大護摩供法要(大本堂)
柴燈大護摩供(有喜苑)　四月十九日(日)

高尾山春季大祭お稚児募集

昔から「子宝」という言葉がありますように、ご家庭は子孫の成長によって、子々孫々に受け継がれ発展していくものです。私達が次代を託するという意味では、子供は文字通り宝であります。

皆様方のお子様が高尾山御本尊飯縄大権現様の御加護の下、健康に、逞しく成長されますよう、お稚児練り供養にご参加をお勧め申し上げます。

定　員　百　名
(定員になり次第締め切らせて頂きます。)

参加料　お稚児　七千円　付添人　千五百円

お申込・お問い合わせは高尾山お稚児係まで
☎〇四二―六六一―一二一五

インターネットでの申し込み受付について

当山では、御護摩修行に参加できない方の為に、御護摩札の郵送を、お受けしております。

手紙、FAX等での申し込みを、お願いしておりますが、インターネットの「高尾山薬王院公式ホームページ」(左記参照)の「お護摩祈祷のご案内」から直接申し込みをすることも出来ますので、是非ご利用頂きますよう、お願い申し上げます。

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　渋谷秀芳
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円